

比企の畑から・夏

小宮山 洋夫

梅雨期、ナス、トマト、トウモロコシが、背丈をぐーんと伸ばす。カボチャ、キュウリ、サツマイモが、つるを伸ばし、葉を茂らせ、地面を埋めていく。

これらの夏野菜は、水に恵まれる梅雨期が、身体の生長期なのである。

早春に植えたジャガイモは、白い花をつける。

土のなかでは、イモがふとりはじめている。草取りをかねながら、イモが地上に顔を出さないよう、土をかぶせる。

クワをさくつと畝間に入れ、その上に土を乗せ、株元に土を寄せる。この土寄せは、農作業のなかでも、もつとも魅力あふれるものの一つだ。

これは、耕すのではない。大地を右に左に、動



ナスの花と実

かすものだ。コツをつかむと、呼吸とクワの動きが同調して、ほとんど疲れない。

「畑は雑草とのたたかいだから」

畑仲間のMさんが、語る。

「いや、ぼくは、雑草はそれほど嫌いじゃないですよ」

腰を折るような返事をしてしまった。

梅雨期は、野菜だけではなく、メヒシバ、エノコログサ、イヌタデ、カヤツリグサなどの雑草が、猛々しく、繁茂する季節でもある。

しかし、この夏の雑草は、ただ単に、畑の困りものというわけではない。夏野菜の生育を助ける、貴重な素材となる。

雑草は、梅雨明け前、穂をつけ、種を結ばないうちに刈り取って、ナス、トマト、キュウリなどの株元に敷きつめると、野菜の根の張りをよくし、土の乾燥を防ぐ。

やがて、雑草は

バクテリアによって分解され、土をつくるとともに、

肥効を発揮するよ

うになる。自然

は、人為にやみくもには、敵対しない。

夏の実もの野菜の収穫の最盛期に先立って、ジャガイモを収穫する。イモ掘りといえは、何といつても、サツマイモだが、ジャガイモも、けっこう楽しい。

「ことしは、出来がいいですね」

とHさん。

「ええ、たくさん、ついています」

みるみるうちに、ジャガイモの山ができる。

ジャガイモは、冬の寒さに強い。上手に保存すると、次年度の植えつけ時期まで食べられる。価



ジャガイモの花

値ある大地からの贈り物だ。

ナス、トマト、キュウリの摘み取りが、忙しくなる。これらの実もの野菜の収穫に、栽培の確かな手応えと充足感を、強く覚えるのは、なぜだろう。

真つ赤に熟したトマトは、鳥たちの好物でもある。被害を防ぐには、ネットを被せるしかない。しかし、ネットでおおわれたトマト畑の眺めは、美しくない。それで、鳥につつかれる前に、赤く色づいたら、すぐにもぎとるようになった。

キュウリは、手間を省いて、もっぱら、地を這う「地這え」をつくっている。

キュウリの実の肥大は、とても早い。葉や草の陰に隠れ、丸太のように太ったものに、出くわして、はっと息を飲むことも、しばしばある。巨大キュウリは、縦に割り、種を除き、キュウリもみにすると、爽快な歯ごたえを楽しめる。

エダマメの実が太る。株ごと引き抜き、クワの木陰に腰をおろし、実を株からむしり取る。

もともとこのあたりの畑は、かつてみんなクワ畑だったという。それで、畑の南の隅にいまでもクワの木が数株残されている。カンカン照りの真夏には、それらがつくる緑陰がうれしい。

クワの黒く熟した実を摘み取って、味わう。ふと、実のなかに小さな虫を見つけ、ぎよつとする。そして、つぶやく。

「この虫は、動物化したクワの実なのだ」

「トウガンを、つくってみませんか」

Hさんから、トウガンの苗をもらった。はじめての栽培だ。



トウガンの雌花と雄花

日さんは毎年、トウガンの種を、堆肥の山の上層に埋めておくという。すると、アジサイの花の咲くころには、苗として利用できる大きさに育つ。その間、何の世話もない。この放任、簡単苗づくりに、心から感心してしまう。

葉の大きさはキュウリ、カボチャのそれに比べ、かなり小さいのに、トウガンは、びっくりするほど、巨大な実をつける。畑に、白い粉でおおわれた実が、いくつもごろんと横たわる風景は、なかなか迫力がある。

収穫は夏の終わりから、秋にかけて。約六か月間も保存に耐え、冬にさしかかるまで食べられる。それで「冬瓜」と呼ばれるのも、栽培してから知った。

丘の上の畑仲間、四人。八十年代、七十年代、六十年代、五十代と、各世代を代表して参加している形になっている。

ぼくのすぐ隣の畑は、五十代のT氏の区画。Tは最近、小型の耕運機を手に入れた。タツ、タツ、タツと、軽快に耕している。

「どうですか。使ってみませんか」

Tは、申し出てくれる。

「あ、ありがとう。まだ、大丈夫。そのうちに」

しかし、ぼくは、いつまでも、クワとシャベルを使い、自分の手足を働かせるだろう。

畑を西に下ると、鳩山の町をほぼ二分して南北に走る車道に出る。いまは、面影がほとんど残されていないが、かつての鎌倉街道の道筋と、ほぼ重なっている。道にそって、町役場、文化会館、保健センターがある。

これらの公共施設の南寄りの集落に、小さなギャラリーがある。ここで開いた友人の個展を観賞していると、

「サルが出た、サルが出た」



畑よりパラボラアンテナを望む

とギャラリーの主人が表で叫んでいる。近隣住民も集まってきた。サルが二階の手すりから、さつと姿を消した。そのあたりは、裏山から野ザルが時折、出没するという。窓さえ閉めておけば悪さもしないので、放っておくそうだ。深山でもないのに、おどろいてしまう。

農家の人の声は耳にしていけないが、サルと共生できれば、それほど豊かなことはない。

サル山の向こうに、気象庁のパラボラアンテナが設置されている。わが菜園からも見える。余命いくばくもない気象衛星「ひまわり」の情報も、キャッチしている。

アンテナを遠く望みながら、畑仕事を、一休みしよう。

(家庭菜園研究家)

カット 筆者